

雲南懇話会 10 年の歩み

—雲南懇話会の今、これから—

雲南懇話会、京都大学学士山岳会

前田 栄三

雲南懇話会は、中国雲南省の最高峰「梅里雪山」を中心とした「雲南・チベット地域の総合的研究」を進めることを目的として、2004 年 12 月 21 日に設立・発足しました。

活動の原点は、雲南・チベット地域に興味・関心を持つ人々が集い、自然科学・社会科学を問わず学術的諸情報を含む各種の情報の交換、人的交流を行い、現地で行う「Field Work」と合わせ「雲南・チベット地域の総合的な研究」を進めることとしています。

具体的な対象地域は、雲南省¹⁾ 及びチベット自治区（梅里雪山の東西の地域）を中心としてその周辺地域、ラオス、ミャンマー、カンボジア、ヴェトナム、タイ、ブータン、ネパール、インド、パキスタン、四川省・青海省・新疆ウイグル自治区・内モンゴル自治区、モンゴル等などに及びます。

概念的には一つは交易路、即ち「道」の周辺地域であり、もう一つは「文化圏」を共有する地域、更にはある文化圏内外の複合文化圏の存在、と言えましょうか。「道」について言えば、長安（現、西安）から西へ延びるシルクロード、長安から大理を経由して遥か西方に伸びる西南シルクロード、雲南周辺地域²⁾ では茶馬古道・塩の道・ひすいの道・フビライ率いる元軍が雲南に侵攻した 3 ルートなど等、実に広範な地域を包含することになります。

後者で言えば、「タイ文化圏³⁾」「チベット文化圏」という呼称が特徴的です。照葉樹林文化、稲作文化、遊牧民の生活文化等の見方も出来ましょう。タイ文化圏と言いましても、その内外には複合文化圏を織りなす山地民の世界があります⁴⁾。

研究課題に応じて、対象地域が拡大することは言うまでもありません。

地球環境・気象・海象に目を向けただけでも、極地・氷河を抱く山々・世界の熱帯林の動向等を研究し学習する必要性を実感します。

雲南懇話会、10 年の活動概況

・雲南懇話会は、2014 年 12 月開催を以って、満 10 年延べ 31 回の開催となりました^{付録1}。

・Field Work ^{付録2} は、延べ 10 回実施。

雲南省（1回は四川省を含む）内は7回、その内 4 回（2008 年～2011 年）は、雲南大学民族研究院教授の案内のもとに実施された。移動には車体側面に「雲南大学」と大書きされた大型バスが使用された。

2012 年も同教授の案内のもとに雲南省南部シブソンパンナ タイ族自治州訪問が計画されたが、尖閣列島領有に端を発した政情不安・社会不安により、航空券の発券も済んだ後にも拘わらず、延期された。崑崙山脈未踏峰登山は2回計画され、1回実施。1回はウルムチを中心とするウイグル族の騒乱、社会情勢不安により出国直前に中止を余儀なくされた。2回、ネパールヒマラヤを訪問している。

・タイ文化圏 Study Tour ^{付録3} は、延べ3回実施。古都チェンマイを中心に北部・北東部・西部・南西部地域を訪問。

・雲南懇話会ホームページを公開している。各回の講演資料、PPT 資料、Fieldwork 資料等を収納している。

・雲南懇話会 ML 登録者数は約 350 名、発信回数は延べ 900 回となっている。

・京都大学ヒマラヤ研究会他が年に1回発行する学際誌「ヒマラヤ学誌」へ、寄稿している。

第 8 号（2007 年 3 月発行）に初めて寄稿して以来、第 15 号まで、累計 37 編を寄稿。

2015 年 3 月発行予定の「ヒマラヤ学誌 第 16 号」には、雲南懇話会から 8 編、寄稿している。

雲南懇話会での講演内容の概要（第1回から第31回雲南懇話会まで）

- ・演題の件数： 148件
- ・講師の員数： 延べ149名。重複を除くと113名。
内、各界の学識経験者・山岳関係者他78名、京都大学山岳部関係者35名。
最多の講演回数は、小林尚礼氏（カワカブ会代表、写真家）の13回。

・国/地域/文化圏別演題数（148件の内訳）

- (1) 雲南省(27)・貴州省(1)・四川省(2)・チベット自治区(6)：計36件。
- (2) 新疆ウイグル自治区(6)・内モンゴル自治区(2)・モンゴル国(3)・中央アジア(5)・イラン(2)：計18件。
- (3) タイ文化圏(インド北東部、ミャンマー北部～北東部、タイ北部、ラオス北部、ベトナム北西部、雲南省西南部～南部、(紅河以南の地域))：計28件。
- (4) ブータン・ネパール・パキスタン・インド・チベット高原南部(ヒンドゥー・クシュ・カラコルム～ヒマラヤ高峰登山、氷河)：計35件。
- (5) 極地(南極2・北極2・両極1)：計5件。
- (6) アフリカ地域：9件
- (7) その他：17件（17件の内容は以下のとおり） 日本の山と氷河(剣沢幻視考、サバイバル登山等)4件、シルクロード(西安からサマルカンド)、日本人とチベット(河口慧海の足跡)、中国少数民族の自治と慣習法、お茶一起源、歴史等あれこれ話(日本と中国)、魚附林の地球環境一親潮、オホーツク海を育むアムール河、富士山から見た世界の天気、地球温暖化でアジアの雨と雪はどう変わるか？黄河断流、氷河生態系と地球環境、雪氷圏の変動を追う、雲南懇話会10年の歩み。

雲南懇話会のこれから

I. 基本的に「夢」「好奇心」を掲げた従来の路線を踏襲します。

- ・ 座学としての雲南懇話会は、原則として年に2～3回実施することとし、毎回、「山」「旅」「探検」「暮らし」に関係する話題を2～3件、学識経験者からの話題を2～3件、合計4～5件で構成するようにします。
- ・ 地域的には、シルクロードに関連してカザフスタン、キルギスタン、タジキスタン等、中央アジアを含めます。国内も、山岳宗教(修験道)の世界、古道など等、折々取り上げたいと思います。
- ・ これまで取り上げることの無かった「スキー」「釣行」、少なかった「自転車による旅行」等も取り上げます。
- ・ Field work について、特に雲南省内においては雲南大学民族研究院の他、同地域の山地民の子ども達への教育支援に実績を有するNPO法人との連携を強めたい。
- ・ タイ文化圏 Study Tour について、タイ王国北部地域訪問に加えて、ヴェトナム西北部(ディエンビエンフー及び周辺地域)、ミャンマー北部・北東部、インド北東部地域の知見を得よう努めたい。
- ・ 雲南懇話会 HP&ML について、その維持・管理・運営を継続します。
- ・ 2014年11月、雲南懇話会はJICA国際協力人材センターの運営する「PARTNER」(国際協力キャリア総合情報サイト)に国際協力団体として登録された。広報の手段として、同サイトの活用を図りたい。

II. 環境基金等、各種基金から資金の導入を図り、具体的な課題(テーマ)について調査・研究・提言を行なうよう努めたい。国内の子たちが対象かもしれない。東日本大震災の被災地の子たちが対象かもしれません。2015年3月発行予定の「ヒマラヤ学誌 第16号」に寄稿した安仁屋政武は、「今後の課題は、これからの5年、10年先を見据えたとき、どのような組織にしてどのような内容で運営を計っていくか、であろう。」と述べています。確実に歩みを進めながら、楽しく思料したいと思います。 以上

参考文献

- 1) 山田 勇編 1997「東南アジア研究」Vol.35 No.3 京都大学東南アジア研究センター
- 2) 上田 信 2006「東ユーラシアの生態環境史」山川出版社
- 3) 新谷忠彦 2008「タイ族が語る歴史」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 4) クリスチャン・ダニエルス他 2007「自然と文化そしてことば 03『特集 国境なき山地民－タイ文化圏の生態史』」 葫蘆舎

付録 1.

第 1 回雲南懇話会； 2005 年 3 月、神田の学士会館

第 2 回雲南懇話会； 2005 年 11 月、JICA

第 3 回雲南懇話会； 2006 年 4 月、JICA

第 4 回雲南懇話会； 2006 年 12 月、JICA

第 5 回雲南懇話会； 2007 年 4 月、JICA

第 6 回雲南懇話会； 2007 年 6 月、JICA

第 7 回雲南懇話会； 2007 年 12 月、JICA

第 8 回雲南懇話会； 2008 年 3 月、JICA

第 9 回雲南懇話会； 2008 年 6 月、国立極地研

第 10 回雲南懇話会； 2008 年 12 月、JICA

第 11 回雲南懇話会； 2009 年 04 月、JICA

第 12 回雲南懇話会； 2009 年 06 月、JICA

第 13 回雲南懇話会； 2009 年 12 月、JICA

第 14 回雲南懇話会； 2010 年 04 月、JICA

第 15 回雲南懇話会； 2010 年 06 月、JICA

第 16 回雲南懇話会； 2010 年 12 月、JICA

第 17 回雲南懇話会； 2011 年 02 月、JICA

第 18 回雲南懇話会； 2011 年 04 月、JICA

第 19 回雲南懇話会； 2011 年 07 月、JICA

第 20 回雲南懇話会； 2011 年 12 月、JIC

第 21 回雲南懇話会； 2012 年 04 月、JICA

第 22 回雲南懇話会； 2012 年 07 月、

神田神保町・一橋講堂

第 23 回雲南懇話会； 2012 年 12 月、JICA

第 24 回雲南懇話会； 2013 年 03 月、JICA

第 25 回雲南懇話会； 2013 年 06 月、JICA

第 26 回雲南懇話会； 2013 年 10 月、JICA

第 27 回雲南懇話会； 2013 年 12 月、東京・市ヶ谷の JICA 研究所（国際会議場）

第 28 回雲南懇話会； 2014 年 04 月、東京・市ヶ谷の JICA 研究所（国際会議場）

第 29 回雲南懇話会； 2014 年 06 月、東京・市ヶ谷の JICA 研究所（国際会議場）

第 30 回雲南懇話会； 2014 年 08 月、東京・市ヶ谷の JICA 研究所（国際会議場）

第 31 回雲南懇話会； 2014 年 12 月、東京・市ヶ谷の JICA 研究所（国際会議場）



付録 2.

第 1 回 Field work； 2005 年 10～11 月（飛来寺～梅里雪山山麓～明永氷河）

第 2 回 Field work； 2006 年 5～6 月（雲南石楠花巡礼）

第 3 回 Field work； 2006 年 10～11 月（シブソンパンナ～大理～西南シルクロードと援蒋ルート）

第 4 回 Field work； 2007 年 7～8 月（崑崙山脈西部地域～タクラマカン砂漠西部、タシュクルガン）

第 5 回 Field work； 2008 年 11 月（雲南省南部・山地少数民族の村々、文化生態村を訪問）

第 6 回 Field work； 2009 年 8 月（崑崙山脈西部地域未踏峰登山、改め「アンナプルナ周遊」。

ウルムチ騒乱に伴う社会情勢悪化の為、出国 1 ヶ月前に転進）

第 7 回 Field work； 2009 年 11 月（雲南省南部、ヴェトナム国境地域、訪問）

第 8 回 Field work； 2010 年 11 月（雲南省西北地域、訪問）

第 9 回 Field work； 2011 年 11 月（雲南省西南地域、訪問）

2012 年 11 月、雲南省南部・シーサンパンナ訪問を計画するも、発券後に中止・延期、社会情勢不安の為。

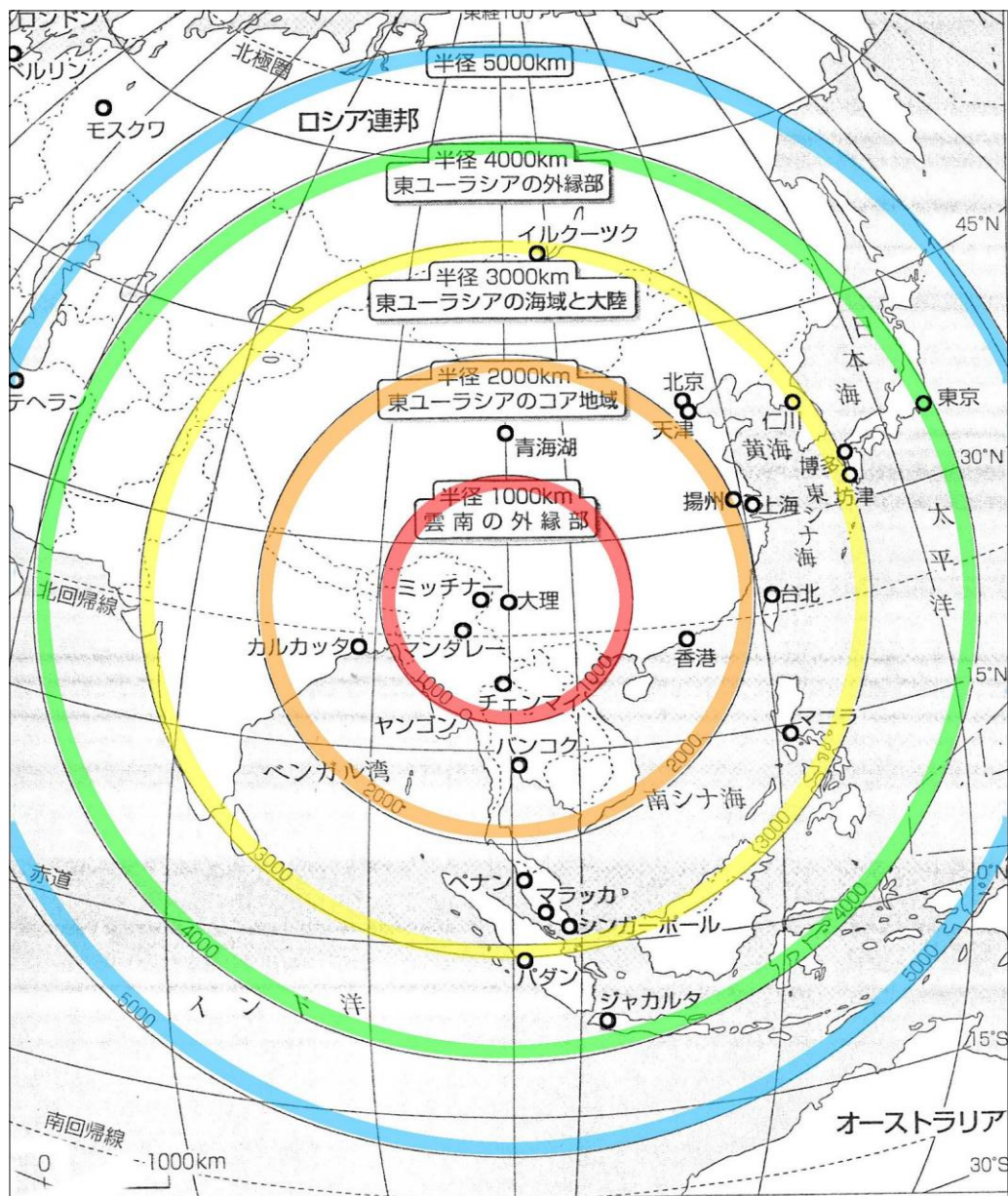
第 10 回 Field work； 2014 年 10～11 月（ネパールヒマラヤ訪問）

付録 3.

第 1 回タイ文化圏 Study tour： 2011 年 2 月、タイ北西部（古都チェンマイ～メーホンソン～クンユアム（戦争博物館訪問）～メーサリアン）少数民族の村々訪問、各地で慰霊、サルウィン河畔に立つ。

第 2 回タイ文化圏 Study tour： 2011 年 7 月、タイ北東部（チェンマイ～メーサーイ（ミャンマー国境の街）～チェンコーン～チェンライ）少数民族の村々訪問、各地で慰霊、Golden Triangle、メコン河を渡る。

第 3 回タイ文化圏 Study tour： 2013 年 10～11 月、タイ中西部（チェンマイ～古都スコタイ～（国境の街）メーソットでミャンマー入国）少数民族の村々訪問、多くの史跡を訪問。



雲南（大理）を中心とした東ユーラシアの地図

出典： 上田信 著「東ユーラシアの生態環境史」山川出版社、2006年、p 073.

（カラー版試作：雲南懇話会 前田栄三）

